町立図書館 町史だより

歴史の道

二月のはじめ、金武町において「**宿道**」※遺構が発見されたという報道がありました。傾斜地に石灰岩を加工した石畳状の道が約三十三メートルに渡って確認されました。

宿道とは、琉球王国時代に首里を起点に本島各地を結ぶ道のことをいいます。大体において東海岸に沿って北上するものを**東宿**、西海岸に沿って行くものを**西宿**、島尻地域を東廻りするのを**南風原宿**、西廻りを**真和志宿**といいます。宿道は今でいう幹線道路のようなものであり、それから枝分かれする脇道や原道などもありました。このように沖縄では古い時代から道が整備され、重要視されていたことがわかります。そこで今回は、町内の「**歴史の道**」とも呼ぶべき古い道を紹介します。

1 「薩摩藩調製図」に見る西原の道

一七五〇年以降に作成されたといわれる「**薩摩藩調製図**」を見ると、西原※間切は隣接地域と数本の道で結ばれています。例えば、首里城を出て汀志良次村（現那覇市首里汀良町）、石嶺村、幸地村の南側、翁長番※所、呉屋村、津花波と小橋川村を経て、さらに小那覇と嘉手苅村を通り抜けて掛保久村を北上し、中城間切和宇慶村へ到るコースを見ることができます。

2 偉人たちが通った道

一八五三年五月三十日、ペリー提督より派遣された探検隊は、那覇に上陸し、首里・弁ケ嶽を経て、西原間切東側へ到る南廻りのルートで小橋川村に着きました。その日は、**イーヌマーチュー**（上ヌ松尾）であったと思われる丘で野営しています。そこで野営した様子のスケッチが残っており、当時を知ることができます（上絵：完全復刻版『ペリー日本遠征記』第一巻より転載）。

また一八八一年（明治十四）十一月十四日、沖縄県令（知事）だった上杉茂憲は、首里・弁ケ嶽から、**トーフグワービラ**（豆腐小坂）と呼ばれる坂道を下って翁長番所に、そこから棚原村を通り抜けて宜野湾間切我如古村へ到達しました。その様子を日誌に「**豆腐小坂ヲ下ル、七折九回、羊腸ノ如シ、嶮峻尤甚タシ**」と記し、羊の腸のように曲がりくねった坂道を下ったと述べています。豆腐小坂は字池田にあり、戦前西原の人々が首里へ上る際によく利用していました（写真1）。その名前の由来は、豆腐を小さく角切したような亀裂が生じていたからだそうです。現在、沖縄自動車道の開通に伴い一部分断され、原野と化しています。

その他、西原間切の道を利用した人物として、イギリス人宣教師のベッテルハイムなどがあげられます。

写真1　豆腐小坂

3 町内に残る古い石畳道

町内には、字棚原に石畳の道が残っています。棚原の石畳道は、斜面地に立地し、現公民館の裏側にあります（写真2）。石畳道には風情があり、当時ここを利用していた人々の様子が目に浮かびます。

写真2　棚原 石畳道

今回、紹介した「歴史の道」はほんの一部です。間切と間切を結ぶ道以外にも、集落内には祭の際、神人（カミンチュ）たちが通る「**神道**」や「**中道**」などと呼ばれる道があります。今でもウマチーや綱ひき行事に利用されています。このように昔から「道」は人々の生活と密接に関わっていました。みなさんがいつも通り慣れている道にはどんな歴史があるのでしょうか？

※遺構…昔の建物や集落を知る手がかりとなる跡。

※間切…明治四十年まで使われていた沖縄独自の行政単位。現在の市町村に相当。

※番所…王国時代、間切行政の拠点となった場所。現在の町村役場にあたる。

参考文献

完全復刻版『ペリー日本遠征記』第一巻南西マイクロ発行／『沖縄県歴史の道調査報告書中頭方東海道』沖縄県教育庁文化課編／『西原町史』第二・四・五巻 西原町教育委員会編